

シマの活動を維持するための区費の使い方とはなにか —沖縄県南城市奥武区自治会における区費の活用方法を巡る意見を通して—

藤崎 綾香（筑波大学大学院）

問題の所在

南西諸島研究においてムラに代えて用いられてきたシマ〔及川 2019〕を対象にした民俗学研究は、シマを「祭祀共同体」と捉える社会人類学的研究と共に発展した影響が強く〔島村 2011〕、今日も信仰の側面が注目されている。一方で、他県に見られないシマの特徴として、高額な報酬が支給される専任区長の存在や自治会とは思えないほどの大規模な予算を持つことから、強力な自治組織を構成していることが以前から指摘されてきた〔高橋他 1995〕。

このことから、シマにおいてどのような自治の仕組みのもとに現在も村落祭祀が行われているのかも含めて、事務的にも金銭的にも負担が大きいシマの体制がシマの中で生きる人々によって今日どのように担われているのかを明らかにすることが、シマを対象とする民俗学研究をより発展させるための課題であると言える。

事例

上記の問題を検討する視点として、沖縄県南城市奥武島（奥武区自治会）における、区費の使い方を巡る区民や区長の意見に注目する。奥武区自治会の年間予算は数百万円に及ぶ。区費の納入が村落のメンバーシップに関わる行為であることが指摘されているように〔本多 2016〕、奥武区自治会の区民も区費を支払うことを「部落民の義務」と捉え、使い道は全て自治会役員に一任している。その一方で区費の活用方法の見直しを検討しているのが、区民の代表として自治会の財政を管理する区長である。

区長職は区費から月 10 万円、南市の業務委託料から月 10 万円の計 20 万円の月給をもらい常勤で勤めなければならないが、島外で現金収入を得る人が増えている現在、積極的に引き受ける区民がほとんどいなくなっている。この時、現区長や区長経験者同士で話された、区民が区長職を引き受けやすくするための対応策に注目すると、区費の活用方法の見直しと密接に結びついていた。本発表では、区費の活用方法の見直しのためにどのような選択がなされようとしているのかを明らかにすることで、現在のシマの活動において何が重要視されているのかを考察する。

参考文献

- 及川高 2019 「近代における奄美村落の自治組織およびその連続性—郷土資料から見た概要—」 『総合学術研究紀要』 第 21 卷 第 1 号
- 島村恭則 2011 「〈研究ノート〉宮古島に出会いなおす：1989 狩俣から 2008 熊本へ」 関西学院大学先端社会研究所紀要
- 高橋明善・山本英治・蓮見音彦編 1995 『沖縄の都市と農村』 東京大学出版会
- 本多俊貴 2016 「現代山村の区費等級割にみる村落結合の再検討—宮城県諸塙村黒葛の事例—」 『共生社会システム研究』 10